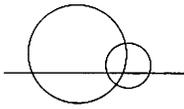


〔講演会〕



近衛文麿公の『われ巢鴨に出頭せず』をめぐって

作家 工藤美代子

【司会】 では講演のほうに移ります。まず工藤美代子先生より、「近衛文麿公の『われ巢鴨に出頭せず』をめぐって」という題でご講演いただきます。工藤先生は東京のお生まれ。高校を卒業後ヨーロッパやカナダへ留学され、その後1982年に『晩香坡の愛』を執筆されました。以来ノンフィクション作家として多くの著作を発表してこられました。1991年には講談社ノンフィクション賞を受賞されております。近衛家に関する著作としましては、本日のご講演のテーマとなる『われ巢鴨に出頭せず』の他に、『近衛家七つの謎誰も語らなかつた昭和史』がございます。また本年10月には『悪名の棺 笹川良一伝』を発表され、精力的に執筆活動に取り組んでおられます。それでは早速、工藤先生にご講演をお願いしたいと思います。工藤先生よろしくお願ひいたします。

【工藤】 ご紹介いただきました工藤美代子です。初めまして。実は2年ほど前だったと思うんですけど、東亜同文書院記念基金会賞という賞をいただくというお話が突然来まして、非常に正直に申し上げますと私はその時まで東亜同文書院なるものに関する知識というのはほとんど無いに等しかったんです。ただこれからお話しする近衛文麿公についての本を書きまして、文麿公のお父様に当たられる篤麿公が力を入れて東亜同文書院というのができたとか、もちろんその程度の知識はありまして、それから近衛家と東亜同文書院との関

わりということと言いますと、文麿公の息子さんである文隆さんが東亜同文書院におられた時期があったと。それは存じておりましたんです。私が賞をいただくほどの仕事をしてるとはとても本人も思わなかったんですけど、ただ東亜同文書院というものに対して興味がありまして、その時に愛知大学の忘れもしない山口さんという女性の方からご連絡をいただいて、ああ、愛知大学がそれを引き継いで今やっておられるんだと、実はそのことも知らなかったんですね。ほんとに恥ずかしい話なんですけど、何も知りませんで、東亜同文書院に対する興味はあったもんですから、それとまあもちろん賞がいただけるというのは大変嬉しいこと、ありがたいことなので、いただくということで、東京でその授賞式がございました。

その時に何がびっくりしたかと言いますと、卒業生の皆様がたくさんお集まりになったんですね。皆さんすごくお元気で、まるで昨日のこのように、戦前・戦中の東亜同文書院に関する思い出をどんどんお話しなさるんです。私全然そんなこと予期しなかったもんですから、テープレコーダーも筆記用具も何も持っていかなかったんです。そのうち1人の方が、ちょっとお名前を聞き忘れたんですけども、そばにいらっしやって、「いやあ、私は文隆さんと上海の東亜同文書院で一緒だったんですよ」っておっしゃるんですね。もちろん皆様すでにご承知とは思いますが、ちょっと簡単に申し上げますと、文隆さんという



のは近衛文麿の長男で、上海の東亜同文書院に勤務した時期があって、そこで美貌の女性スパイ、テンピンルーという、これはもうほんとにきれいな人なんですけども、その人と事件に巻き込まれて日本に帰ってきたといういきさつがあるんです。そっちの話をしちゃうと長くなりすぎちゃいますので、今日は割愛させていただきます。でも、すごく面白い話です。

ちょっと参考のために申し上げますと「ラスト・コーション」という映画があるんですけども、ご覧になった方いらっしゃるかも知れません。非常によくできた映画でして、これの女主人公が、実は文隆さんが引っかけた、という言い方は大変失礼なんですけども、まさに引っかけってしまった女性スパイ、テンピンルーなんです。ただし「ラスト・コーション」という映画には文隆さんは登場なさらないんですね。文隆さんが出てくるかなと思って私も見に行っただんですけども、残念ながら全く文隆さんは登場なさらなかった。

しかしこの文隆さんというのも大変数奇な運命を辿った方で、戦後ご承知のようにソ連軍の捕虜となって、ソ連でずっと収容所に入れられ強制労働をさせられて、しかし最後まで自分は共産主義者には転向しない、ならないということをきっちりとおっしゃって、いざ帰れるという間に亡くなった方なんです。この方のことに関して、また別に私は『近衛家七つの謎』という本を書いたんですけど、文隆さんのことも分からないことがいっぱいあるんです。いずれにせよ、文隆さんもある意味歴史上の人物でありまして、劇団四季が「異国の丘」というミュージカル、これもやっぱり文隆さんがモデルになっていますし、知っている人は知っている人なんですけども、その文隆さんと東亜同文書院で一緒だったとおっしゃる方が突然現れて、私に「いやあ、新しい先生が来たからいっちゃんへこましてやろうと思って酒瓶をもって文隆さんのところに行ったら……。ものすごく文隆さんがお酒が強くってバンバン飲んだので、自

分のほうが先につぶれちゃって、文隆さんはケロツとしてた」というお話を、活字になったそういう話は私ももちろん読んだことがあるんですけど、実際に文隆さんを知ってる方から話を伺ってほんとに驚きました。ああ、こんな方がまだ日本にはいらっしやるんだと。

実はその時に、東亜同文書院についてもっと調べたいな、調査をしたいなと思ひまして、将来本を書けたらなあということで、今でもその気持ちは持っているんです。10月でしたか上海に別の取材でまいりまして、ちょうど尖閣諸島問題で反日デモが中国各地で起きてる頃だったものですから、どうかなという時期ではあったんですが、まあ大丈夫だろうということで10月に上海に行きましたら、無知で恥ずかしいんですけども東亜同文書院の建物の場所が、今交通大学になっていると。そこは江沢民が卒業したことで有名なんだということを読んだものですから、ガイドと車を雇って交通大学に見に行っただんですね。見に行けば何か看板でも出てるかなと思ったんです、実は。ところが全然考えが甘くて、今日ご案内いただいた愛知大学の先生にお聞きしましたら、いやもう建物はすでに無いんだと。無くなっていて、東亜同文書院の昔の敷地の一部に交通大学があるだけなんだということを知り初めて知りました。それをもっと先に知ってればよかったですけれども。

上海にまいりました時に、ある新聞社の支局長の方とお食事する機会がありまして、「私は東亜同文書院に非常に興味を持ってて、テーマとして本を書きたいと思ってる」という話をしましたら、昔はニューヨークに在留邦人が一番多かったんですね。ところが今、ニューヨークを抜いて上海が一番在留邦人が多くて、6万人を超える日本人が住んでると。いろんな日本人の方がいらっしゃるわけなんですけども、その中に歴史研究サークルというのがありまして、戦前の日本の面影・足跡が残るところを歩こうじゃないかという、歴史散歩

みたいなのがはやりになって、東亜同文書院のところを小さなグループで訪ねたりする会合が、ついこのあいだもあったばかりですよと言われました。ああ、今でも関心を持つての方がいらっしやるんだなと思いました。

これから調査をすることによって、東亜同文書院がどんな存在だったのかということが少しずつ分かってくるんじゃないかと思うんですね。まだまだほんとに正直申し上げて取材を始めたばかりですから、皆様の前でお話しするのはすごく恥ずかしいんですけども、東亜同文書院から愛知大学への流れの中で、どういうことがあったのかということ、ご存命の方達にお聞きする。上海に行きましたら「上海にもかつて東亜同文書院に在籍した中国人の方がまだご存命でいらっしやいますよ」と言うんですね。台北にもいらっしやる。日本にもいらっしやる。そういう方達の戦後って何だったんだろうということ、今からでも遅くないから、まだ皆さんがお元気で記憶がしっかりしてるうちに、ほんとにお聞きしたいなと思っております。

『われ巢鴨に出頭せず』というのを今日大きく書いていただきました。これは近衛の「え」の字がちゃんと昔の漢字の「衛」なんですよ。私が本を出す時に旧漢字にするか新字にするか、死ぬほど迷ったんです。それで出版社側に相談した時に、本の中で近衛の「衛」を旧漢字にしてしまうと、東條英機の「じょう」も人偏を付けた「條」にしなきゃならない。そうするといろんな方のお名前を全部旧漢字にしなきゃいけない。「東條さんには旧漢字を使わなくてもいいだろう」と言う編集者の人がいまして、ご承知のように東條と近衛は非常に仲が悪くて、突然話が逸れて申し訳ないんですが2人はほんとにすごく仲が悪かったんですね。片方だけ旧漢字を使って、東條は人偏なしでいいだろうというわけにもいかない。しょうがないからということで、『われ巢鴨に出頭せず』の本の中の近衛は新しい漢字の「衛」を使っ

たんですね。ですからこの字は使ってないんです。すごく使いたかったんですけども。それで本を出しましたところ、読者の方から何通もお便りをいただきました。お前は何かと教養がない女なんだ」と。近衛の「え」という字はこれが正しいんだぞというお手紙をいただきました。それは分かてるんだけれども統一ができなかったんだという事情がございました。

でもまあなぜ近衛文麿の伝記を書きたかったかと言いますと、まず第1に、戦後ほとんど近衛に関するきちんとした伝記というのは出てないんですね。もちろん何冊か研究書の優れたものはありますけれども、いわゆる普通の方が読んで面白いという本は残念ながら近衛文麿に関しては無いんです。なぜかということをお考えした時に、近衛文麿に対する評価というのは戦後一偏に定まってしまうところがあるんですね。それは何かと言いますと、「優柔不断」、「弱い」、「内閣を投げ出した、放り出した」総理であったと、近衛に対する批判は非常に多いんです。それはどこから来てるかと言うとやっぱり戦後の、「日本は大変悪いことをしたんだ」、「戦前の政治家も軍人もみんな間違ってたんだ」という考え方に基づいた近衛批判というのがあったのだと思います。

それで、簡単に、非常に分かり易く言うと、先の大戦というのは負けた戦争なんですよ。何と言っても日本が非常に惨めな敗北を喫して、その焼け野原から戦後立ち上がった。いずれにせよコテンパンに負けたんです、悔しいですけど。そうすると、今になると誰が悪かったかということが、しばらくのあいだ社会一般の関心事だったんですね。そして東條はほんとに悪かった、こんな悪いやつはいないとか、それから何人かほんとに駄目だと言って、その中に近衛も入ってたわけなんです。近衛文麿が優柔不断だったとかいろいろ批判があつて、今日はちょっと私持ってきてませんが、近衛が亡くなった時の朝日新聞の記事なんか、それはもうひどいものでした。死んだ



人にさらにここまで言うかというぐらいのもので、近衛の評価は實際地に落ちていたことがあったんです。

それを、ちょっと待ってくださいよと、そんなに簡単に近衛文麿を非難できるんでしょうかということを考えて、実は本を書き始めたわけなんです。その背景には、日本が負けたということはまぎれもない事実ではありますけれども、それはさておき、戦前あるいは戦中あるいは戦後、日本の国のことを本当に思って、日本人としての背骨がしっかりと通った人達がいたのを全否定するという歴史観はいかがなものかなと。もう1度それを考え直してみませんかということで、私の一連の仕事として、まず山本五十六という人を取り上げました。この人は比較的傷が少ない。なぜ少ないかと言うと、終戦になる前に死んじゃったんですね。ご承知のように、パプアニューギニアでアメリカの戦闘機に撃たれて墜落して死んでしまうわけです。終戦まで生き延びなかったがために、山本五十六というのは唯一、第2次世界大戦後も英雄でいられたんです。しかし私が山本五十六の伝記を書きたいと言って、山本五十六の出身地の辺りで出ている地方紙5紙ほどに山本五十六の伝記を連載した時も、初めは大変だったですね。軍人の伝記なんてとんでもないという声もあったんです。しかしもう戦後60年経ったんだからいいじゃないか、やりましょうということで連載を始めてみたら、私は今まで新聞連載、週刊誌連載、月刊誌連載をいくつもやらせていただきましたけど、あれほど熱心な読者がいたケースはないんです。反響がすごかった。私なんかは本当に売れないノンフィクションをこつこつ書いてるものですから、そんな反響があるというのはまあ珍しいことなんですけども。山本五十六の時は、彼の出身の新潟市で講演会をやると2,000人くらいの人達が来てくださる。山本五十六のファンの方達が。ああ、すごいなあと思いました。しかし山本五十六の名前は今、教科書にも載ってないんです。学

校でも教えないというのはどうなのか、という思いがありまして、それで山本五十六の再評価をしたかったわけです。

それからついでに、ちょっと横道に逸れて申し訳ないんですけど、どうしてもこれだけ言わせていただきたいのは、山本五十六の妻というのが悪妻だったということ、ある有名な作家が伝記で書いたんですね。それ以来、五十六の妻は悪妻だということでもうすっかり通ってしまって、あらゆる五十六に関する本には必ず、悪妻で不美人の札子と書かれるんですね。これはたまたまラッキーなことに、奥様の一番下の妹さんがまだあの時94歳ぐらいで生きていらっしゃったんですね。その方にお会いして昔の若い頃の写真とか、五十六夫妻の話とか聞いたら、非常にきれいな方で夫婦仲もすごくよかったですね。ですから、いかに作られてしまったイメージというのが怖いということだと思うんです。今日はお聞きくださってる方、割と男性の方が多いんですけど女性の方もいらっしゃるので申し上げたいんですけども、女性の身にしてみたら、妻の立場はどうしてくれるんだと言いたいんですね。不美人で気が強くて無神経でとさんざん悪口書かれたら、もうそれですと後世までいつちやうというんじゃない、いくらなんでもそれはかわいそうだという思いが、私にはあったものですから。

ついでに申し上げておきますと、近衛文麿公は非常に不思議な方で、女性関係に関して言いますとやっぱり外に愛人の方がおられて、私なんかが見るとよせばいいのと思うんですけども、大変おきれいでしっかりした千代子夫人という方がいるのに、外に愛人が2人ぐらいいて、文麿公が亡くなったあと皆さんが手記を書いたんです。これもどうしたのっていう気がするんですね。今はどんな会社の社長だろうと政治家だろうと、奥様に知られたら大変なことになりますから恐ろしくて愛人なんか作れない時代ですけども、当時のことです。文麿公のお子さん達が、「お父様ど

うして今日帰りが遅いの」と言うのと、千代子夫人が「お父様は夜学よ」っておっしゃったっていうぐらい、まあ夜遊びを男がするのは普通だという時代だったんですけども。ただ私がちょっと分からなかったのは、新橋の芸者さんなんかは平気で新聞に、文麿公が亡くなってからですけどいかに自分が文麿公に愛されて、子供ができて私達は新居を構えましたとかって書くんですね。それはちょっとどうかなっていう気がするんですけども。

どうも協道に逸れすぎまして申し訳ありません。話を元に戻しますと、何で近衛を書きたかったかと言うと簡単な理由でありまして、近衛文麿は弱かった、優柔不断であったというのが本当にそうだったのかということをごきちんとして検証したかったという一語に尽きます。おかげさまでこの『われ巢鴨に出頭せず』は、真面目な昭和史のノンフィクションというのは売れないのが当たり前なのですけども、それにしても珍しく大変よく売れました。しかも近衛の再評価という意味でたくさん読者の方からお便りをいただきまして、ようやく近衛公をきちんとして公平に評価してくれたというような声がありました。ですから基本として、日本人としての背骨をきちんとして持つてくる人のことは、戦争のあとに日本の社会に蔓延したいわゆる自虐史観と言いますか、とにかくみんな悪かった、戦争中から日本で活躍した人はみんな悪かったという考えからちょっと距離を置いて、歴史をもう1回新しく考え直したいということで、別に右でも左でもなく、中道として見直したいという気持ちが強かったために書いたのですが、多くの方にご理解をいただきました。

それで近衛文麿公のあとに書いたのが吉田茂……、吉田茂について今いろんな評価がありまして、これは本題と逸れるので割愛いたしますけど、もう1度考えよう。実は先月笹川良一という人の本を出しまして、笹川良一という人はもうほんとに日本の黒幕、ドンと言われた人ですが、今ま

で誰も書いた人がいないんですね。とにかく悪人だというふうに言われておまして、これはまだ出たばかりの本なんですけど、『悪名の棺』というタイトルで、笹川良一というのはこれだけみんなに悪口を山ほど書かれてるから、いったいどんな犯罪を犯したんだろうということを徹底的に調べたんですね。そうしたら1つも犯罪を犯していない。ただ、たまたまものすごく金儲けに天賦の才能がある人で、株とか土地の売買とか、そういうもので巨万の富を築くんです。それで、戦前に飛行機でヨーロッパに行つてムッソリーニに会つたり、山本五十六に協力して飛行場を寄付したり、そういうことをやった。戦後になってご承知のように競艇をやつて、儲かつたお金を使つていろいろ福祉事業をしたという人なんです。何でこれだけ悪口を言われるのかというのは全くよく分からなくて、徹底的に調べてみたら、まず1つにはものすごくいともない悪口を書かれて、いくらなんでもそれはひどいからということで側近の人達が名誉棄損で訴えましようと言つても、これを書いたライターの人にも奥さんや子供がいて、生活のために書いたんだからいいじゃないか、ほつておけと言つて、絶対に訴えるとか訂正記事を出させるということはしなかつたんです。それでありとあらゆる流言蜚語と言いますか、すごい噂が流れて悪評が定着したというのが笹川良一さんなんです。息子さんがおっしゃつてましたけれど、それはやっぱり親父の間違ひだったと。きちんとして訂正するべきところは訂正するべきだったんじゃないかということをおっしゃつてます。

近衛文麿に関しても同じことが言えると思うんですね。『われ巢鴨に出頭せず』は今文庫本でも中央公論新社から出ておりますので比較的手に入りやすいと思うんですけども、何を書きたかったのかと言いますと、近衛文麿というのは日米開戦を阻止するために全力を挙げて尽くした人なんです。そのことが全く評価されていないんですね。それからよく、「近衛は内閣を投げ出した」と、



近衛の説明の時にまるで枕詞みたいに必ず付くんですが、あれは東條英機が陸軍の大臣を出さなかったから内閣解散をせざるを得なかったのであって、近衛が投げ出したわけでもなんでもないんですけど、そういう書き方をするわけです。私は文隆さんの本の時に確か書いたと思うんですけども。何しろ近衛家というのは、もちろん今もそうですけども戦前から大変なお金持ちで、戦争中にダイヤモンドを散りばめた柄の刀を2ふり作ったそうです。1ふりを長男の文隆さんが出征する時に持たせた。もう1ふりは文麿公が東條英機に、「戦争がもし負けた時にあなたが腹を切るために使いなさい」と言ってその刀を渡したというんです。それぐらい東條と近衛のあいだというのは非常に険悪で、文麿公は東條のことを大嫌いだったと思うんですね。長男の文隆さんを一兵卒として戦地にとばしたのは、はっきり言って東條英機ですから。それでも「僕は構いません。お国のために使ってください。乃木大将の例もあるではないですか。息子を差し出すのは望むところです」と言って微動だにしなかったのが近衛文麿です。

ですから近衛というのは今まで言われてきたような弱い人ではないし、優柔不断でもないと思います。むしろ戦争が勃発する時に何とかそれを止めたいと思って、本当にあらゆる努力をして、それでも戦争が始まってしまった。いよいよこのままでは日本が負けるという時に、何とか早く戦争を終わらせなかったらどんどん人が死んでいくわけですから。皆さんご存じのように、終戦の少し前からものすごい勢いで死んでいったわけですね。ですから1日早く終わらせれば、それこそ大変な数の命が助かるわけです。そのためにまた近衛は奔走します。戦争を止めさせるためにいろいろな案を出して。ご承知だと思いますけれど、近衛家ゆかりの京都のお寺に裕仁天皇（先の昭和天皇）をお連れして、そこにご退位願って裕仁（ゆうじん）法王として入っていただくとか、いろんなこ

とを考えたんですね。何とか終焉させなければならぬ。その時も近衛はものすごい勢いで動いてるわけなんです。そういうことが全く評価されなかったのは、大変残念なことだと思います。それで近衛文麿というのは、日本人としての強い誇りを持っていた政治家であり、貴族であったということを知ってほしくということでもこの本を書いたわけなんです。その過程で、東亜同文書院というのを知って、ああこれはすごいと思いました。

すみません、今日この「近衛文麿公の『われ巢鴨に出頭せず』をめぐって」というので講演の内容、概略をだいたい前に用意して愛知大学のほうにメール添付でお送りしたんですけど、それから実はいろんな事件がご承知のように起きまして、北朝鮮が韓国に爆撃をしかけるとか、世界が今ものすごい勢いでグチャグチャに変わってるものから、私の頭の中もだいたい攪拌されてグルグルに回ってしまいまして、ちょっとお話がこの目次通りにいかないことをお許しいただきたいと思えます。

いずれにしても、東亜同文書院というのは中国人の学生と日本人の学生が中国で共に学ぶ学校として設立されたということでした。今、日本にとって一番頭が痛いのは、たぶん中国人とどうやって付き合っていくかということだと思います。マスコミ関係、また皆さんもおそらく同じだと思いますけれども、私達も集まってパーティーとかお食事という時になると、必ず話題になるのがあの厄介な隣人、あの厄介な隣の人々というのが中国なわけです。経済界の方にとっては、もちろん中国というのはまたないビジネスチャンスであるのは間違いのないことですが、ビジネスはしたいけれどもその反面、共産党の独裁の国家であることも間違いのない。そういう意味での恐ろしさというのがあるわけです。法律なんて明日変えようと思えばコロコロ変えられるわけですから。

そういう怖さと一緒にこれから中国と付き合い
ていかなければならない。ですから中国との付き
合い方というのは、たぶん今の日本の一番大きな
テーマではないかと思うのです。アメリカとの付
き合い方というのは、これは難しいんですけど、
だいたいある一定の基準があって、民主党になっ
たり共和党になっただけでももちろん変わりはある
んですけど、第一に友好国ですから、とんでもな
いことというのはそんなに心配しなくてもいい。
突然、アメリカが核兵器を日本にぶっぱなすなん
てことはあり得ないことですよ。中国が日本に
核兵器なんてこともあり得ないですよ。なぜか
と言うと、中国はアメリカと戦争したくないわけ
ですから。中国とアメリカの戦争、そんなことで
血を流すのはどちらも嫌ですからそれは心配ない
んですけど、北朝鮮という非常に厄介なもの
があります。北朝鮮の後ろには中国が控えてるわけ
ですから、北朝鮮と日本の関係は非常に複雑です。
拉致被害者の問題もありますし、日本人妻の問題
もありますし、非常に多くの複雑な問題を抱えた
まま、その後ろに中国がいる。そうすると、中国
とどう付き合うかによって北朝鮮の問題が全く変
わってきてしまうわけですね。こういう今の日本
の状況を考える時に、東亜同文書院のそもそもの
設立の考えと言いますか、理念というのはすごい
ものだと思うんです。中国人も日本人も一緒に学
びましょうということですよ。まだ私よく研究
はしてないので東亜同文書院のことに関してはそ
れほど詳しいお話はできないんですけど、いず
れにしてもその当時学生達が大旅行と言って、ほ
んとに中国の各地を旅行して歩いて、現地の人達
と交流していた。

話は全く飛びますが、今の日本の若い人達は、
大変情けないんですけども留学とか、海外に出
るのを非常に嫌がるんですね。私は昭和25年生
まれで今60なんですけど、私が若い頃というの
は、外国に行けるチャンスは何でもかんでもとに
かく捕まえて行きたかった時代ですよ、戦後初

めてみんな行けるようになって。ところが今の日
本の若い人に聞くと、面倒くさい、言葉が通じな
い、食べ物がおいしくない、外国になんか行きた
くないという人が圧倒的に多いんですね。中国に
行って、中国の僻地まで歩いて、農村の津々浦々
まで歩いて、向こうの方達と交流しようなんてい
うガッツ、気概のある若者というのは、いないと
は言いませんけれど非常に少なくなってるわけ
です。

ところが東亜同文書院の卒業生の方達、あるい
は在籍した方々というのは、非常に壮大なスケ
ールで中国全土を旅しています。私が今非常に興味
津々なのは、じゃあ逆に中国人の方で東亜同文書
院に在籍した方々は、どんな思いで勉強したの
か、どんな思いで日本人学生と交流をしていたの
か、その辺はすごく興味があって、これから調べ
に行きたいなというふうに思っています。いずれ
にせよ、今日本が抱えている中国とどう付き合っ
ていくかという問題に対する解答というのはなか
なか見つからないのです。その見つからない中で、
東亜同文書院の歴史というのが1つの手がかりに
なるのではないかと。こういう歩みというものを研
究して、皆さんがもう1度それを知ることで、こ
れから中国とどう付き合っていくかというような
指針ができるのではないかと。あまり政治的な話
はどうかと思うんですけども、はっきり言って今
の日本の外交はメチャクチャだと思います。つい
このあいだも、北朝鮮が突然韓国を爆撃した。こ
の時、日本の政府がやらなければならないことは、
「それはとんでもないことだ」という認識を示す
ことです。当たり前ですよ。誰が考えたってそう
ですよ。突然、民間人が住んでるところへ爆弾
を落として爆撃するというのはとんでもないこと
です。だからそれは駄目です、いけないことだか
ら今は韓国政府を支持しますという表明を菅政権
は即座に出すべきだったと私は思うのです。そう
いうことを一切しないで、状況を調べて情報を聞
いてから考えますというのが総理大臣の返事なん



ですね。何という情けないことかと思いました。

それは結局こういうことだと思うんです。外交においては、言うべきことは言わなければならない。もちろんいろんなことを考慮しなければならないということがあります。中国からエアバスが来なくなったらどうしようとか、北朝鮮を怒らせると中国との関係が面倒くさくなるとか、もちろんあるかも知れない。もっと身近な話で言えば、在日の北朝鮮に親しい方達を怒らせたら困るとか、そういうこともあるのかも知れません。政治というのは常にそういうふうに複雑に絡んでいるものですから。しかし、国として言わなければならないことは言うべきだと思うんです。特に先の大戦で日本は非常にたくさんの過ちを犯した。人も傷つけ自分も傷ついた立場であるならば、そういう非常識なことをする北朝鮮に対してやはりきちんと「あなたは間違っている」という声明をまず出した上で、じゃあ何ができるのかということを考えるべきだと思うんです。そこが全く欠如しているのが、今の日本の外交だと思うんです。尖閣諸島の場合も早々と中国人の船長を解放してしまう。あれに対して不満を持つてる日本人は大変多いです。ああ、解放してよかった、よくやってくれましたという日本人は正直言って少ないです、私の周りには。向こうがぶつかってきたことははっきり分かっているのですから、その映像を公開しないというのはおかしいのではないかと。そのあとすぐにロシアのメドベージェフが国後に行った。北方領土に足を踏み入れましたよね。このことも当然つながっていると思います。中国は日本の足下を見て、「何をやっても文句を言わない国だ」と見た。ロシアも「じゃあ北方領土もうちがもらっておこう」ということになるわけで、そういう外交ではとてもとてもこのさき立ち行かないのではないかという危機感が私にありまして、これに関しましては近衛文麿という人がいかに先見の明があったかということを知っていただきたくて、今日資料を持ってまいりました。

日本が本気で大国を相手に注文を付けたという。

注文を付けたのは、第1次世界大戦直後に行なわれたパリ講和条約の席上で、「人種差別の撤廃について」ということでした。これは昭和8年の1月ですけれども、その時に若き文麿公は西園寺公望に随行して国際会議に出席しております。それで有名なベルサイユ条約が締結されたわけなんですけれども。この文麿公がパリの講和会議に出かける直前、『日本及び日本人』というのに掲載された論文があるんですね。これは文麿公の基本的なスタンスだと思います。「英米本位の平和主義を排す」ということで、今読んでも極めて画期的な論文なんです。英米は当時から世界をほとんど独り占めしていた感が強い国家だったわけで、イギリスと日本はまだ日英同盟を結んでいた時分ですから「英米本位の平和主義を排す」というのはかなり思い切った発言と言えるわけです。大国のエゴというものに対してクレームを付けたのは近衛が初めてなんです。ハルノートというのが来てついに開戦が決まるという流れは皆さんよくご承知だと思うんですけれども。その近衛の著作に載っている論文を、ちょっと分かりやすく引用していきたいと思います。

「第1次世界大戦後の世界に民主主義、人道主義の思想が旺盛となるのはもはや否定できないところである。我が国がこの影響から逃れられないのも当然のことであろう。これらの思想は、要するに人間の平等感から発するもので、自由民権や国民平等の生存権や政治上の特権と経済上の独占の排除や機会均等などの主張の基礎をなしている。このような平等感は永遠不変のもので、これが国体に反すると思うのは偏狭の徒である。ただし我々が遺憾に思うのは、我が国民はとかく英米人の言舌にのまれる傾向が強く、彼らの言う民主主義、人道主義というのをそのまま割引もせずに受け入れるのは困る。日本人だけ良ければ他国は構わぬというのではない。つまり日本人の正当な生存権を確認し、この権利に対して不当不正な

る圧迫をなすものがある場合には、あくまでこれを戦う覚悟がなければならない。彼らの言う平和主義とは、自己に都合のいい現状維持のことなのだ」というようなことを近衛文麿はすでにこの時代に書いてるんですね。この最後に、「かかる場合には我が国もまた自己生存の必要上、戦前（第1次世界大戦の前）のドイツのように現状打破の拳に出ざるを得ない。また白人種による黄色人種への排斥が甚だしいこと、人道上由々しき問題なり。正義人道の上からこれを主張せねばならない」というふうに書いてあります。

近衛文麿については本当にいろんなことを言う人がいまして、「近衛文麿はコミンテルンの手先だ。実は共産主義者だった」と大真面目に書いてる本まであるんです。確かに近衛の周りにはゾルゲとか、いわゆるコミンテルンの手先だった人達がいたことはいたんです。それは間違いないんですけども、しかし今読み上げた論文をお聞きいただいても分かるように、近衛という人は右とか左とかいうことで決まる人ではなかったんですね。是々非々で、アメリカでも喧嘩する時は喧嘩しますよ、イギリスとでもしますよ、という人だったわけです。それがやはり先見の明と言いますか非常に進んでいて、今でも通用する論理じゃないかなというふうに私は思うんです。よく勘違いされるんですけど、私は中国批判も恐れずにはっきり申し上げます。中国というのはほんとにメチャクチャなことをする時がありますからはっきり中国批判をしますけれど、その逆にアメリカに問題がある場合にはアメリカ批判をします。それはもうどちらもするということで、やはり大切なのはバランス感覚ではないかなと思います。近衛文麿という人はそういう意味で懐が深いと言いますか、右も左も両方ともお付き合いするという部分があったんですね。近衛のそういう先見の明というのは、現代にも充分通じるのではないかと思います。

それからこれは多少近衛文麿のプライベートな

面になってしまいますが、近衛文麿をそこまで走らせたものは何なのか。元々あの方は五撰家筆頭の貴族（華族）で、政治なんかしなくても全く食べるのには困らないし、生涯関わり合いを持たなくてもよかった人なわけです。近衛を叩く側の人達がよく、「所詮はお公家さんだから」とか、そういうことで放り出すんだとか、駄目なんだとかいう言い方をするんですけども。近衛が政治の道に入ったのは、やはり西園寺公望公の強力な勧めといますか依頼があったということが1つには大きかったと思います。それからもう1つは、ここからは私の想像なんですけれども、吉田茂と近衛文麿というのは肝胆相照らすと言いますか大変考え方がよく似ていたんですね。ですから吉田は近衛のことをよく理解していて、いわゆる近衛上奏文というのは吉田茂が書いたということはよく知られていることです。吉田茂と近衛の共通点というのは、2人とも実の母親に育てられていないんです。幼い時に実母が亡くなって、養母に育てられている。その寂しさというのは、近衛は終生、死ぬまで抱えていたわけなんですね。そういう心の空白のようなものがあって、その埋め合わせをするという意味で、あれだけ日本のために尽くしたのかなと。これは私のあくまで想像なんですけれども、近衛と吉田の2人が力を合わせて終戦のために戦ったというのは、そういうところがあったのではないかという気がしております。

講演内容の概略と全然違う話になって申し訳ないんですけども、このところずっと私の頭の中にあるのが「国境」という言葉なんです。日本という国があって、国境というものがありますね。第2次世界大戦が終戦を迎えた時に、戦前の皇族で梨本宮という方の妃殿下に梨本宮伊都子という方がいたんですけど、この方は大正天皇のお妃候補の1人だった方で、当時の宮廷では一番の美女と言われた大変美しい方なんですね。伊都子妃のお嬢様は朝鮮の李垠（りぎん）殿下と結婚して、向こうで最後まで生涯を全うされた方なんですけれ



ど、とにかくその梨本宮伊都子妃殿下という方が非常に細かい日記を付けておられたんです。私は女性が書いた日記というのは大変興味があるものですから、梨本宮伊都子妃の日記を見ていたら、終戦の日の彼女の日記に「ああ、これで全部終わりだ。日本はまた明治前の小さな日本に戻ってしまう」という一文があります。私は昭和25年の生まれですから、生まれて物心ついた時はもう日本は「小さな日本」でした。日本というのは4つの島からできて、それ以上のことは全く分からないし、もちろん発想もない。だけど梨本宮伊都子妃殿下の時代というのは、日本にはたとえば満州があったりとか、サイパンがあったりとか、グアムがあったりとか、もちろん北方領土もちゃんと持っていたし、いろんなところに日本の領土があったわけですね。日本がどんどん海外に侵出していった時代があった。それを戦争で全部失った。それで日本の国境というのはこういうものだったということを、私は子供の時から教えられて育ったわけです。

日本は軍隊を持つのをやめた。これはマッカーサーが占領時代に、マッカーサー1人ではないですけれども幣原喜重郎とかいろんな人達が、とにかく日本はもう永遠に軍隊を持ちませんということにしてしまったわけですね。それがなかったとしても、たとえば軍隊があったとしても、日本はかつて世界にどんどん出て行ってえらい目であって、いっぱい人が死んで日本中が焼け野原になったわけですから、もう1回軍隊を出すなんていう度胸は絶対ないと思うんですね。そういう発想もないと思います。もしそういうことを日本がすると言ったらもちろん私は先頭に立って、「絶対にそれはしてはいけない、他国と戦争をするのはやめましょうよ」と言うと思います。それは間違いありません。日本が国境を越えて他国に出ていくということはありません。それでいいんだという教育を長年受けて60歳になったんです。ところが最近思うのは、「待てよ」と。日本人が、あ

るいは日本の軍隊が他国に侵略することはないとしても、他国の軍隊が日本の国境を越えて入ってくるということはあるかも知れない。その時にいったい私達はどのような備えがあるのだろうかということのことを全く考えてない。これはほんともう1回原点に帰って、それこそ東亜同文書院の歴史を探って調べながら考えなければならないことだと思うのです。その対応と言うか、これからどうするかということに関しましては。

いわゆる尖閣諸島、これは中国が虎視眈々と狙っていることはもうはっきりしてるみたいです。日本人で「そうじゃない、中国は尖閣諸島に無関心だ」と言う方はいないと思うんです。それはほとんどの日本人が知ってます。あそこに大変な資源があるんだということも分かってます。対馬が危ないという報道がだいぶ前にされましたけれども、外国人がどんどん日本の土地を買っているという話も報道され始めてだいぶ経ちます。今、新潟市が大変な騒ぎになってます。領事館が広大な土地を買って新潟に中華街を作ろうとしている。中国人がドッと入ってくる。新潟でしたら港がありますから中国からは非常に近い。日本の国境が崩れるというのはあり得ないと思って、私なんかはずっと育ってきたわけです。「日本は過去に悪いことをして国境を広げて伸ばしてきたけれど、それを縮めて世界にごめんなさいと謝って、たくさんの命を犠牲にして今の平和があるんですよ」と言われて育ってきた私達が、じゃあ日本の国境がもしかして他から侵略された場合にはどうしたらいいのかということは、非常に大きな課題として残ると思います。

一番よい例が、実はヨーロッパのEUだと思うんですね。EUというのは、まず経済的な国境を取っばらしましょうよということで、貨幣を同じにしたわけです。ユーロという同じ貨幣を使えば簡単に行き来ができると。その時私はカナダに住んでいたんですけれども、EUの構想を聞いた時、これはおかしいなと思いました。なぜかと言えば、

民族も違うし経済の度合いも違うのにそれを同じ貨幣を使ってですよ、じゃあ1つの国が破産したらどうするんですかと。昔でしたら1つの国が破産したらその国が破産したということで済んだけれど、EUになったら他の国が全部その赤字を補填しなければならない。そうしたら今、案の定ギリシャ、アイルランドと、次々と起きてきてますよね。しかも私はEUがユーロになって間もなくヨーロッパに旅行してパリに行った時、物価が値上がりして仰天したんです。こんなに値上がりするのかと。とにかく私はやっぱりEUというのは大変問題があると思うんですね。先の首相などは東アジア共同体などということ盛んに唱えておりますけれど、そのようなことをやった時に何が起きるか。日本の国境が崩れるということ考えたことがないんじゃないか。それを私達はもう1度、真剣に考える必要があるのではないかと思います。

近衛公の話からすっかり飛んでしまったのですが、私がこれから日本はどうなるのかということを考える時、近衛文麿という人に常に思いが帰っていくんですね。どうして帰っていくかと言うと、近衛文麿というのは、世界を相手にして日本という小さい国を運営しなければならなかった。これは大変なことだったと思うんですね。だって皆さん、たとえば今見てもお分かりになると思うんですけど、鳩山さんにしろ菅さんにしろ、「中国を相手に上手に日本を運営していますか」と聞かれたら、「そうです」とはなかなか言えないと思うんですね。100点満点付けられないと思うんです。中国を相手に日本をマネジメントする、運営させていくということは非常に難しいことなんですね。これが近衛文麿の例でもよく分かると思います。はっきり言って近衛は中国のことに関して失敗したと思います。それは本人も承知しています。「僕は間違いを犯しました」と自分でも言っています。だからその責任を取って自殺をしたわけです。非常に潔く青酸カリを飲んで自殺してるわ

けなんですね。そこが東條英機とは違うところだと私は思います。まあそれは東條さんには東條さんの言い分があると思うので、一方的に東條が悪いとは言いませんけれども、近衛の最後の死に際の美しさ、これはやっぱり日本人としての誇りを持っていたからだと思うんです。そう考えた時に、今の政治家、どなたでもいいですけど、おそらく菅内閣もそんなに長く続くとは思いません。やはりどう考えても菅さんでは難しいと思います。支持率もどんどん下がってますよね。じゃあ自民党がいいかと言えば私はそうは思いません。民主党をやめてまた自民党に戻って、今の自民党でいいかと言ったら私はそれも非常に多くの問題を抱えてると思います。じゃあ誰が日本の指揮をとったらいいのかというのは大変難しい問題であって、なかなか言い切れないところではあるんですけど、しかし少なくとも近衛文麿くらいの気概とか責任感とかそういったものをきちんと持って日本の政治の頂点に立ってほしい。

そういうことをこの頃ほんとに強く感じるんですね。ですから私も不勉強ですけど、これから東亜同文書院の歴史を勉強させていただいて、いわゆる近視眼的に、中国がこんなことをやったからけしからんとか、対日デモしてるからいけないとか、そういうことではなくて、もっとその下にあるもの、いったいどうやってこの人達と付き合い合っていたらいいのかというのが、実は私達日本人に課せられた今一番大きな課題ではないかというふうに思ってるんです。そういう時期に、今回東亜同文書院の展示会が開かれて、日本中のいろんなところで展示されて非常に成功をおさめてきたということ、しかも愛知大学が今でもきちんとその文化を継承している。東亜同文書院のものというのは日本の財産だと思うんです。その財産をきちんと愛知大学が継承して、守って管理してくださっている、これは非常に日本人としてありがたいと思っております。戦前のものは全部悪かったんだ、唾棄すべきものだということで大切

にしない時代が長く続いたと思うんですけども、それにもかかわらず愛知大学がその中で守ってきたものは貴重なものだったなと今になって思うのと、私達いわゆる文章でもって世の中に自分の意見を発信することを仕事としている者としては、そういうものをこれから調べさせていただいて、日本の社会に発信することをしないと、意味がないのではないかなというふうに思っております。

そういうわけで、もしも皆様お暇がありましたら、文庫版『われ巢鴨に出頭せず』という本がまだ書店にあると思いますので、近衛文麿公にご興味をお持ちでしたらぜひ読んでいただきたいのと、あととにかく戦前の日本人は全部悪人だったとか、日本が悪いことをしたから諸外国に何も発言してはいけないとか、アメリカには何も言うてはいけないとか、イギリスにも楯を突けないとか、そういう考え方はこれからはやめていこうではないかと。近衛文麿のようにきちんと言うべきことを言う。第1次世界大戦の直後にさえも、あれだけのことを英米に対して言った日本人がいたので

すから、私達もそれをきちんと継承していく。しかし、国際社会の一員としての責任も果たす。年をとればとるほど、自分の生まれた日本という国がいかによろしい国であるか、いかに大切な国なのかということがだんだん分かってきました。若い頃は全然分からなかった。外国がよくてよくてしょうがなかったのですけれども、年をとるほど日本の良さが分かってきました。だからこそ守らなければならないものがあるのではないかなと思っております。

ほんとにとりとめのない話になってしまいましたが、近衛公の偉大さ、すばらしさにちよつとでも触れていただけたら大変嬉しく思います。今日は本当に皆さんありがとうございました。

【司会】 工藤先生、大変貴重なお話をありがとうございました。

それでは今から休憩に入ります。なおまだ展示をゆつくりとご覧になっていない方は、向かいの展示室をこの休憩のあいだにご覧いただければ幸いです。ではしばし休憩に入ります。